

# 文化財 IPM コーディネータ資格を取得して

下川可容子

## 1. はじめに

私は平成23年12月に行われた第1回文化財 IPM コーディネータ資格取得のための講習会を受講し、資格取得しました。講習会では、文化財分野における IPM の定義が明確になった事や、IPM に必要な幅広い分野の知識が得られた事が大きかったと感じています。

文化財 IPM コーディネータの資格を今後どのように活かしていけるのか、自身の過去を振り返りつつ考えてみたいと思います。

## 2. ゼロからのスタート

私が所属する株式会社タクトの前身は、2005年福岡県太宰府市に設立された NPO 法人です。NPO 設立の目的は、それまでに長年携わってきた、遺跡の発掘調査で出土した遺物の整理や報告書作成作業などの経験をいかして、地域の文化財の保存と活用に向けた取り組みを支援したいというものでした。ですから IPM についてはまだその言葉すら知りませんでした。

当 NPO を設立して間もないころ、同市内では九州国立博物館（以下、九博）の開館準備が進められていましたが、縁あって IPM 活動の一環としての初めての仕事を請け負う事になりました。施設の建設段階から IPM を推進・実践されていた博物館では、すでに市民ボランティアの環境部会の方々がその理念を学びながら、館内点検（IPM ウォッチング）や IPM メンテナンス実験など具体的な活動を始められており、その熱意と活発さに圧倒されました。私達は博物館に大量一括寄贈された郷土人形コレクションの収蔵準備作業を業務として行う事になりましたが、それは、1万点以上にもほのぼの資料の一つ一つについて IPM の観点で点検観察・記録・簡易クリーニングを行うもので、生物処理の要否判断のための

情報を集める作業でした。対象物をよく観察するという点では埋蔵文化財の分野で身に付けた観察眼は役に立ちましたが、IPM については知識も経験もないゼロからのスタートでしたので、何を見るのか、どう記録するのか、資料をどのように扱うかなど常に博物館からの指導を受けながらの日々でした。

作業を続けていく中で IPM の基礎的な考え方や具体的な方法などを学んだのですが、以後も九博の IPM 活動に携わる様々な方々・団体と一緒に勉強会や研修会などに参加し、文化財 IPM の理念や背景、必要とされる基本的な知識・技術の習得に努力を重ねました。

九博の IPM は、ボランティアや NPO、PCO など立場や役割は違いますが、文化財を守り伝えるという大きな同じ目的の元で、それぞれやれる事、得意な事を実践している実感があり、私達にもできる IPM の係わり方があるという発見もありました。そして今思えば、それは文化財 IPM のコーディネートの一つの姿であった事に思い至ります。

## 3. IPM メンテナンス

さて、2008年夏の会社化を経て、現在株式会社として、IPM の観点による展示・収蔵環境の整備や生物モニタリングに関する業務を行っています。主に、県内外の様々な形態、規模の施設の IPM メンテナンスの業務を受託しています。全てが一般競争入札による事業です。NPO 時代から請けている、九博の露出展示資料や収蔵庫の IPM メンテナンス業務の考え方や方法をベースに、評価や検討を繰り返しながら行っています。

IPM メンテナンスは一般の清掃とは異なり、資料保存に適した環境づくりのための様々な情報を集める点検観察作業と、それに基づいて清浄な

空間をつくり維持する清掃とが一体となったものです。収集した情報によって施設・設備などのハード面はもちろん、人員や時間、予算、体制などのソフト面においても資料の保存に関するあらゆる問題点や課題を整理する事ができ、具体的な改善策へと進められます。こうした理由から、当社が行うIPMメンテナンスの実際の現場でも室内の点検と観察を重視しています。

様々な情報を得るためには、様々な視点が必要ですが、温湿度・空調・加害虫とその生態など、まさにIPMコーディネータの講習会で受講した基本的な知識が必要となります。また、実際に問題点を発見した時、柔軟に対応するためにも多様な視点で考える事が大切だと理解しています。最近では、単なる生物被害防止のための対策としてだけでなく、「資料保存」「IPM」をキーワードに、施設全体の改善や、総合的な施設管理体制を模索する事で、そこで働く人達の労務環境の改善・合理化にも繋がるといった声も聞かれるようになりました。

IPMメンテナンスはこうした情報収集の絶好の機会といえますが、いろいろな事情でこれを日常化・定期化している施設はまだそう多くないのが現状ではないでしょうか。私達はこれまでの経験を活かし、あらゆる施設でも取り入れられる方法を探究しています。



IPMメンテナンスの様子

#### 4. コーディネータとしての今後に向けて

(1) 正しい知識をさらに深め、役立てる  
繰り返しになりますが、多種多様な施設の、そ

れぞれのIPMに柔軟に対応するためには多様な視点と解決に向けた正しい知識や手法が欠かせません。とかく虫やカビの被害実態と処理方法に注目しがちな目を、講習会ではその背景となった環境要因の解析や施設管理の具体的な方法へと視野を広げる事となりました。今後も幅広い分野に目をむけて情報収集し知見を広げていきたいと考えています。そして業務として行っているIPMメンテナンスの上でも点検ポイントの整理や被害対策のプラン作成などに役立てていきたいと思ひます。

#### (2) 目的を同じくする人達との協力関係を築く

IPMについて何も知らずにスタートした私達でしたが、業務に必要な知識や経験は、その都度専門家の方々のご指導や助言を頂きながら得ることができました。安全かつ効果的に目の前の問題に対処するためにも、それぞれの専門分野で様々な事業を展開されている関連企業と連携した作業の重要性を感じます。また、生物被害対策の専門家でなくても市民ボランティアやNPOなどいろいろな立場や役割の人達が活躍できるステージをIPM活動の中に用意できる可能性を経験的に学んできました。

IPMを進めるときに、関連企業もふくめていろいろな人達の協力を得る事で、よりその館に根差したものになると思ひます。互いに信頼し、それぞれのスキルを最大限に活用するための役割分担と責任を明確にしながら、上手く協働できるように導く事がコーディネータに求められていると感じます。

#### 5. おわりに

当社では、IPMを長く続けていくためにもそれ自体が苦にならない、むしろ楽しんでもらえるような提案を、業務を通して示していきたいと考えています。社内では突拍子もないアイデアや実現不可能だと思えるものも出てきますが、それを考える事は面白いものですし、何らかの成果ができればやはり嬉しいものです。その後のやりがいにも繋がります。

一つでも多くのアイデアや工夫が出れば出るほど、共感し参加する人が多ければ多いほどIPM

は楽しくなります。文化財を守り伝えたいと思う全ての人が“チームIPM”の一員です。チーム内のポジションは様々ですが、コーディネータは監督、あるいはプレイングマネージャーとして現場での活躍が期待されているのだと思います。今後

もチームの仲間を増やす発信力と、要としての実践力を磨いていきたいと思っています。

(しもがわ・かよこ 株式会社タクト)